レーニン主義なのか それとも 社会帝国主義なのか？

——偉大なレーニンの生誕百周年を記念して

外文出版社
北京

レーニン主義なのか
それとも
社会帝国主義なのか？

——偉大なレーニンの生誕百周年を記念して

『人民日報』『紅旗』『解放軍報』編集部

（1970年4月22日）

外文出版社
北京

プロレタリア階級の偉大な革命的教師レーニン

レーニン主義は、帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義である。

スターリン『レーニン主義の基礎について』

目　次

一、レーニン主義の旗じるしは無敵である……1
二、プロレタリア階級独裁は
　レーニン主義の根本問題である……9
三、フルシチョフ＝ブレジネフ
　裏切り者集団の反革命クーデター……14
四、口先での社会主義、実際の帝国主義……28
五、いわゆる「ブレジネフ・ドクトリン」とは、
　まぎれもない覇権主義である……37

六、ソ修のはかない大帝国の夢……50
七、全世界人民は団結して、米帝、ソ修および
各国反動派を打倒するためにたたかおう……65

レーニン主義なのか
それとも社会帝国主義なのか？

——偉大なレーニンの生誕百周年を記念して

『人民日報』『紅旗』『解放軍報』編集部

一、レーニン主義の旗じるしは無敵である

今年の四月二十二日は、偉大なレーニンの生誕百周年にあたる。全世界のマルクス・レーニン主義者、プロレタリア階級と革命的人民は、偉大なレーニンへのもっとも崇高な敬意をいだいて、歴史

的意義をもつこの日を記念している。

レーニンは、マルクス、エンゲルスが逝去したのちにおける国際共産主義運動の偉大な指導者であり、全世界のプロレタリア階級とすべての被抑圧人民の偉大な教師である。

レーニンが誕生した翌年、一八七一年には、パリ・コンミューンの蜂起がおこった。これは、プロレタリア階級がブルジョア階級をくつがえす最初の試みであった。レーニンが革命活動をはじめたころ、すなわち十九世紀の末、二十世紀のはじめ、世界は帝国主義とプロレタリア革命の時代にはいった。レーニンは、帝国主義および種々さまざまの日和見主義、とりわけ第二インターの修正主義との闘争のなかで、マルクス主義をうけつぎ、守り、発展させ、マルク

ス主義を新しい段階、すなわちレーニン主義の段階に高めた。まさにスターリンがのべているように、**「レーニン主義は、帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義である」**①。

レーニンは、帝国主義の矛盾を分析し、帝国主義の法則を明らかにし、帝国主義時代におけるプロレタリア革命の一連の重要な問題を解決し、社会主義は**「はじめは、一国または数ヵ国で勝利する」**という問題を解決した②。レーニンは、プロレタリア階級がブルジョア民主主義革命のなかで指導権をにぎらなければならないという思想を解明するとともに、ロシアのプロレタリア階級を指導して、一九〇五年の革命で総演習をおこなった。レーニンの指導した偉大な十月社会主義革命は、資本主義の旧世界から社会主義の新世界へ

の根本的な転換を実現し、人類の歴史に新しい紀元をきりひらいた。

レーニンが理論の面と実践の面でプロレタリア革命事業にはたした貢献は、きわめて偉大なものである。

レーニンが逝去したあと、スターリンは国内外の階級敵との闘争のなかで、党内の右翼と「左」翼の日和見主義分子との闘争のなかで、レーニン主義の事業をうけつぎ、守った。スターリンはソ連人民を指導して社会主義の道をひきつづき前進し、偉大な勝利をかちとった。第二次世界大戦のなかで、ソ連人民はスターリンの統率のもとに、ファシストの侵略をうちまかす主力となり、人類史上に永久不滅のかずかずの偉大な功績をうち立てた。

中国共産党人と中国人民は、われわれがまさにレーニン主義から解放の道をさがしあてたことを永遠に忘れない。毛沢東同志は、**「十月革命の砲声がとどろいて、われわれにマルクス・レーニン主義がおくりとどけられた」「中国人はマルクス・レーニン主義という世界のどこにも適用できる普遍的な真理をさがしあて、それによって中国の姿は変わりはじめたのである」**③とのべている。毛沢東同志は、**「中国人民は一貫して中国革命を偉大な十月社会主義革命の継続とみなしている」**④と指摘している。

毛沢東同志は、マルクス・レーニン主義の理論を運用して、中国革命の根本問題を創造的に解決し、中国人民を指導して、世界のプロレタリア革命史上もっとも長期にわたる、もっとも激烈な、もっ

ともきびしい、もっとも複雑な革命闘争と革命戦争をすすめ、中国というこのような東方の大国で人民革命の勝利をかちとった。これは、十月革命後における世界のプロレタリア革命のもっとも偉大な勝利である。

いま、われわれは世界革命の新しい偉大な時代にある。レーニンが在世していたころにくらべて、国際情勢にはすでに天地をくつがえすような変化が起きている。世界の歴史全体の発展は、レーニンの革命の学説の正しさを立証し、レーニン主義の旗じるしは無敵であることを立証した。

しかし、歴史には曲折がある。エンゲルスが逝去したのち、ベルンシュタイン＝カウツキーの修正主義が現われたように、スターリ

ンが逝去したのち、またもやフルシチョフ＝ブレジネフの修正主義が現われた。

フルシチョフが十一年間権力をにぎったのち、修正主義内部に分裂がおこり、ブレジネフがフルシチョフにとってかわった。ブレジネフも五年あまりの時間をへており、現在、ソ連ではほかでもなくこのような人間が、レーニン生誕百周年の「記念」活動を主宰しているのである。

レーニンはかつて、「被抑圧階級のあいだに盛名をはせる革命的指導者の名前を、かれの死後にその敵が自分のものにして被抑圧階級をだまそうと試みることは、歴史上いつでもあったことである」⑤とのべた。

ブレジネフ裏切り者どもは、偉大なレーニンにたいして、まさにそうやっているのである。かれらは、いわゆる『レーニン生誕百周年記念テーゼ』のなかで、こともあろうに公然と、プロレタリア階級の革命的教師としてのレーニンの偉大な形象をねじまげ、かれらの修正主義のしろものをレーニン主義といつわっている。かれらは、レーニンを「記念」するかのように装い、実際にはレーニンの名を盗用して、かれらの社会帝国主義、社会ファシズム、社会軍国主義をおしすすめることに拍車をかけているのである。これはレーニンにたいするきわめて大きな侮辱である！

徹底的に、ソ修裏切り者どものレーニン主義にたいする裏切りを暴露し、ソ修社会帝国主義の階級的本質を暴露し、社会帝国主義が

資本帝国主義と同じようにかならず覆滅するという歴史の法則を指摘して、米帝、ソ修および各国反動派に反対する世界人民の偉大な闘争をいちだんと推進すること、これがわれわれの当面の戦闘任務である。これはまた、われわれが偉大なレーニンの生誕百周年を記念することの重要な意義でもある。

二、プロレタリア階級独裁はレーニン主義の根本問題である

レーニンは、日和見主義、修正主義との闘争のなかで、プロレタリア革命の根本問題は、暴力で国家権力を奪取して、ブルジョア階級の国家機構をうちくだき、プロレタリア階級独裁をうち立てるこ

とである、とくりかえし指摘した。

レーニンは、「ブルジョア国家がプロレタリア国家（プロレタリア階級独裁）によって交代されるのは、『みずから死滅する』道をつうじては不可能であり、それは、通例、暴力革命によってのみ可能である」⑥とのべた。

レーニンはまた、マルクスのプロレタリア階級独裁についての学説は「プロレタリア階級が歴史上はたす革命的役割についてのかれの学説全体と不可分にむすびついている。この役割を仕上げるものが、プロレタリア階級独裁である」⑦とのべた。

レーニンの指導した十月革命の勝利は、とりもなおさずマルクス主義のプロレタリア革命とプロレタリア階級独裁についての学説の

勝利である。十月革命の道は、とりもなおさずプロレタリア階級が暴力革命をつうじてプロレタリア階級独裁をたたかいとる道である。

十月革命の前後、レーニンは新しい革命の実践を総括して、マルクス主義のプロレタリア階級独裁についての学説をいちだんと発展させた。レーニンは、社会主義革命は「幾多の激烈な階級衝突からなる一時代である」⑧「この時代が終わらないあいだは、搾取者には必然的に復活の望みがのこされていて、この望みは復活の行動に転化する」⑨と指摘した。したがって、レーニンは、プロレタリア階級独裁は「ブルジョア階級をうちたおしたプロレタリア階級にだけ必要なのではなく、さらに、資本主義と『無階級社会』すなわ

ち共産主義とをへだてる歴史的時期全体にも必要である」⑩と考えた。

こんにち、レーニン生誕百周年を記念するにあたり、レーニンのこうした輝かしい思想をあらためて学ぶことは、きわめて重要な現実的意義をもっている。

周知のように、ソ修裏切り者集団は、ほかでもなくプロレタリア革命とプロレタリア階級独裁というこの根本問題においてレーニン主義を裏切り、十月革命を裏切ったのである。

はやくもフルシチョフの修正主義の姿が暴露しはじめたときに、毛沢東同志はつぎのように鋭く指摘した。「わたしが思うには、二つの『刀』があり、一つはレーニンで、一つはスターリンである。現在、スターリンという刀は、ロシア人に捨てさられた」「レーニンという刀も、現在、ソ連の一部の指導者にいくらか捨てさられているのではないだろうか？　わたしの見るところでは、これもかなり捨てさられている。十月革命はまだきめがあるかどうか？　まだ、各国の手本とすることができるかどうか？　ソ連共産党第二十回大会におけるフルシチョフの報告は、議会の道をへて国家権力をかちとることができるといっている。つまり、各国はもう十月革命に見習わなくてもよいということである。この門を開いたからには、レーニン主義は基本的に捨てさられたことになる」⑪。

三、フルシチョフ＝ブレジネフ
裏切り者集団の反革命クーデター

世界最初の社会主義国ソ連に、なぜ資本主義復活が現われ、そして社会帝国主義になってしまったのか？　われわれはマルクス・レーニン主義の観点、とりわけ毛沢東同志のプロレタリア階級独裁のもとでひきつづき革命をおこなうことについての理論で問題を観察すれば、これを理解することができる。それは主として、ソ連国内の階級闘争の産物であり、ソ連党内のひとにぎりの資本主義の道を歩む実権派が党と国家の大権をかすめとった結果であり、つまりソ連のブルジョア階級がプロレタリア階級の権力をのっとった結果で

ある。同時に、それはまた国際帝国主義が自己を滅亡から救うために、ソ修裏切り者集団をつうじて、ソ連で「平和的転化」の政策をおしすすめた結果でもある。

毛沢東同志は「**社会主義社会は相当長期にわたる歴史的段階である。社会主義というこの歴史的段階においては、なお階級、階級矛盾と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在し、資本主義復活の危険性が存在する**」⑫と指摘している。

社会主義社会における階級闘争は、依然として国家権力の問題に集中されている。毛沢東同志は、「**党内、政府内、軍隊内および文化界各方面にまぎれこんだブルジョア階級の代表人物は、一群の反革命修正主義分子であって、いったん機が熟せば、権力を奪いとっ**

て、プロレタリア階級独裁をブルジョア階級独裁に変えようとする」⑱と指摘している。

十月革命後のソ連では、ブルジョア階級はくつがえされたとはいえ、階級と階級闘争は依然として長期にわたって存在している。スターリンはかつて、党内にもぐりこんだかなり多くの反革命的ブルジョア階級の代表人物、たとえばトロツキー、ジノビエフ、カーメネフ、ラデック、ブハーリン、ルイコフといったやからを一掃したが、このことはほかでもなく、階級闘争がずっと鋭くおこなわれていることを物語っており、資本主義復活の危険性がずっと存在していることを物語っている。

最初のプロレタリア階級独裁の国であったソ連は、いかにして

プロレタリア階級独裁をかため、資本主義の復活を避けるかという問題について、経験がまだとぼしかった。こうした情況のもとで、ソ連共産党内にひそんでいた資本主義の道を歩む実権派フルシチョフは、スターリンが逝去したあと、奇襲攻撃のやり方でスターリンを悪どく誹謗する「秘密報告」をもちだし、さまざまの陰険狡猾な手段をつかって、ソ連の党と国家の大権をのっとった。これはプロレタリア階級独裁をブルジョア階級独裁に変える反革命クーデターであり、社会主義をくつがえし資本主義を復活させる反革命クーデターであった。

ブレジネフは、フルシチョフの反革命クーデターの共謀者で、のちには、フルシチョフにとってかわった。ブレジネフの登場は、実

質的にはフルシチョフの反革命クーデターの継続である。ブレジネフはフルシチョフ二世なのである。

毛沢東同志は、「**修正主義の登場は、つまりブルジョア階級の登場である**」⑭「**現在のソ連は、ブルジョア階級独裁であり、大ブルジョア階級独裁、ドイツ・ファシスト式の独裁、ヒトラー式の独裁である**」⑮と指摘している。

毛沢東同志の英明な論断は、きわめて深くソ修社会帝国主義の階級的実質と社会的根源を明らかにし、ソ修社会帝国主義のファッショ的本質を指摘している。

ソ修裏切り者集団がソ連の党と国家の大権をのっとったあと、ソ連のブルジョア特権階層は、自己の政治的権力と経済的権力を大い

に拡大し、党、政府、軍隊と経済、文化の領域で支配的地位をしめ、またこの特権階層から、国家機構の全部をにぎり社会の富全体を支配する官僚独占ブルジョア階級、すなわち新しい型の大ブルジョア階級が形成された。

この新しい型の官僚独占ブルジョア階級は、かれらの手にある国家権力を利用して、社会主義所有制を走資派所有制に変え、社会主義経済を資本主義経済と国家独占資本主義経済に変えた。かれらは「国家」の名を借りて、なにはばかることなく国庫を略奪し、さまざまな手段をつかって、ソ連人民の労働の果実をほしいままに横領して、ぜいたくきわまる享楽的な生活をし、いばりちらしている。

この新しい型の官僚独占ブルジョア階級は、**復活の望みを復活の**

行動に変えたブルジョア階級である。かれらは、十月革命の英雄的な人びとをたたきおとして、ソ連各民族人民の頭上にふたたび君臨し、その反革命の小さな朝廷をつくった。したがって、かれらは極度に反動的で、極度に人民を憎み、極度に人民を恐れている。

この新しい型の官僚独占ブルジョア階級は、あらゆる反動的没落階級と同じように、その内部にはさまざまな矛盾が充満している。かれらは、自分のかすめとった権力をけんめいに保つために、ぐるになって悪事を働き、相手の腹をさぐりながらいがみあい、排斥しあっている。かれらの立場が困難になればなるほど、かれらのあいだで陰に陽にすすめられている争いはますますはげしくなる。

この新しい型の官僚独占ブルジョア階級は、最大限の利潤をかす

めとり、その反動支配を維持するため、自国の人民を搾取、抑圧すると同時に、必然的に狂気じみた侵略と拡張をおこない、国際帝国主義の世界分割の列にくわわって、凶悪きわまりない社会帝国主義政策をおしすすめるものである。

この新しい型の官僚独占ブルジョア階級は、ソ修社会帝国主義の階級的基盤である。いま、この階級の総代表はブレジネフなのである。かれは、狂気のようにフルシチョフ修正主義をおしすすめ、かつ発展させ、フルシチョフが執政していた時期にすでにはじまった、資本主義復活から社会帝国主義への転化を達成しつつある。

ブレジネフは登場してから、いわゆる「新経済体制」を全面的におしひろめ、資本主義の利潤原則を法令の形で固定して、官僚独占

寡頭の勤労人民にたいする搾取を強めた。官僚独占寡頭は、苛酷な重税をとりたて、人民の死活を無視して、ヒトラーの「バターよりも大砲」という政策を実施し、国民経済の軍事化をはやめて、社会帝国主義の軍備拡張と戦争準備の必要にこたえている。

ソ修裏切り者集団の、時代に逆行するやり方は、社会的生産力にきわめて大きな破壊をもたらし、ゆゆしい結果をまねいている。工業は衰退し、農業は低下し、家畜は減少し、通貨は膨脹し、供給は逼迫し、国家市場は商品が払底し、勤労人民は日ましに貧困化している。ソ修裏切り者どもは、ソ連人民が数十年間いっしょうけんめい働いて蓄積した大量の富を濫費したばかりでなく、しかも卑屈な態度で、第二次世界大戦の敗戦国西ドイツに借款を乞い求め、はて

は国の資源を売り渡し、日本の独占資本をシベリアにひきいれることまでしている。こんにちのソ連経済は、すでにぬけだしようのない危機におちいっている。ソ連人民の友として、われわれ中国人民と世界の人民は、ソ修裏切り者がレーニン主義のふるさとをこのようにひどい有様にしてしまったことにこのうえない憤りをおぼえ、ソ連の広範な人民が資本主義制度の全面的復活のもとで、かずかずの苦難にさいなまれていることに深い同情をよせるものである。

ソ修裏切り者集団はいぜん、「プロレタリア階級独裁は、ソ連ではもう必要でなくなった」、ソ連は「もう全人民の国家になった」⑯といっていた。ところが、つじつまのあわないことに、こんどは「全人民の国家はプロレタリア階級独裁の事業をつづけている」⑰

とか、「全人民の国家」と「プロレタリア階級独裁の国家」とは「同じ類型」⑱であるなどといっている。かれらはまた「党の指導を強める」、「規律を強める」、「集中を強める」などとさかんにわめきたてている。「全人民の国家」といったり、「プロレタリア階級独裁」といったり、二つのまったくあいいれない概念をむりやり一つに結びつけるのは、大衆をあざむき、大ブルジョア階級の独裁をおおいかくすためにほかならない。かれらのいう「党の指導」とは、ひとにぎりの社会ファシスト寡頭の、広範な党員と大衆にたいする政治的統制のことである。かれらのいう「規律」とは、かれらの支配に不満なすべての人を弾圧することである。かれらのいう「集中」とは、政治的、経済的、軍事的権力をいちだんとかれら一

味の手に集中することである。一言でいえば、かれらがこれらの看板をかかげるのは、みなファッショ独裁を強め、侵略戦争を準備するためである。

内外ともに苦境にたたされているソ修裏切り者集団は、レーニンを裏切り、十月革命を裏切るその反動支配を維持するため、ますます露骨に反革命の暴力にたよっている。こんにちのソ連では、特務、密偵が横行ばっこし、反動的な法令があとをたたない。革命は罪とされ、無実の罪で投獄されたものが全国にみちており、反革命は表彰され、裏切り者が栄達を祝いあっている。多くの革命者と罪もない人が強制収容所やいわゆる「精神病院」にぶちこまれている。ソ修集団は、戦車と装甲車をくりだして、人民の反抗に野蛮な

弾圧をくわえることまでしている。

レーニンはかつて、「**世界中で、ロシアほど国内の住民の大多数のものが抑圧されているところは、どこにもない**」、ロシア人以外の民族は「**異民族とされている**」⑲「**民族的抑圧は、平等の権利をもたない諸民族のあいだに、君主たちにたいするきわめて強烈な憎悪をつのらせた**」⑳と指摘した。現在、ソ修新ツァーは旧ツァーの民族抑圧政策を復活させ、差別扱い、強制移住、分割、監禁など悪らつな手段で、各少数民族に抑圧、搾取と迫害をくわえ、ソ連をふたたび「**民族の牢獄**」㉑に変えている。

ソ修裏切り者集団はイデオロギーの全領域でブルジョア階級の全面的独裁を実施している。かれらは、プロレタリア階級の、社会主

義の思想と文化を狂気のように破壊し、おさえつける一方、骨の髄までくさったブルジョア階級の思想と文化を洪水のようにいたるところにはん濫させている。かれらは軍国主義、民族排他主義、人種主義をさかんに鼓吹し、文学芸術を社会帝国主義をおしすすめる道具にしている。

かつてレーニンは、ツァーリズムの暗黒支配をきびしく糾弾したさい、つぎのようにかいた。警察の専横、野蛮な迫害、道徳の退廃は、「**石までがさけぶというほどの、はなはだしい程度に達している**」！㉒人びとは、ソ修裏切り者集団の支配をレーニンが当時きびしく糾弾したツァーリズムとくらべてみるがよい。

フルシチョフ＝ブレジネフ裏切り者集団の反革命クーデターは、

あらゆる帝国主義と反動派のはたせない役割をはたした。まさにスターリンがのべたように、**「要塞は、内部から奪取するのが一番たやすい」**㉓のである。十四ヵ国の武力干渉も、白軍匪賊の叛乱も、ヒトラーの数百万の軍隊による攻撃も、帝国主義によるさまざまな破壊と転覆、封鎖と包囲もうち破れなかった社会主義の要塞が、このひとにぎりの裏切り者によって内部から奪いとられてしまったのである。フルシチョフ＝ブレジネフ集団は国際共産主義運動史上最大の裏切り者であり、許せない極悪非道の歴史の罪人である。

四、口先での社会主義、実際の帝国主義

レーニンは第二インターの裏切り者どもを批判したさい、かれら

は**「口先での社会主義、実際の帝国主義であり、日和見主義が成長して、帝国主義になったものである」**㉔と指摘した。

ソ修裏切り者集団も修正主義から社会帝国主義になったものである。異なったところといえば、第二インターの社会帝国主義者、カウツキーの如きやからは、まだ国家権力をにぎっておらず、ただ自国の帝国主義に奉仕し、他国の人民から収奪した超過利潤のなかからいくらか甘い汁を吸っていただけであるが、ソ修社会帝国主義は、かれらがのっとった国家権力にたよって、直接他国の人民を収奪し、奴隷化しているという点である。

歴史の経験は、ひとつの社会主義国が、その国家権力をいったん修正主義集団にのっとられると、ソ連のように社会帝国主義となる

か、またはチェコスロバキアやモンゴルのように従属国や植民地になりさがるということである。フルシチョフ＝ブレジネフ裏切り者集団の登場の実質は、ほかでもなく、レーニンとスターリンのつくりあげた社会主義共和国を社会帝国主義の強権国家に変えたことであり、この点を人びとはいまはっきりみてとることができる。

ソ修裏切り者集団が唱えているのは、レーニン主義、社会主義、プロレタリア国際主義だが、やっているのはまぎれもない帝国主義の手口である。

ソ修裏切り者集団は口先ではそのいわゆる「兄弟国」にたいして「国際主義」を実行しているといっているが、実際には、「ワルシャワ条約機構」、「コメコン」など一つまた一つの手かせ足かせで、

東ヨーロッパの一部の国とモンゴルをいわゆる「社会主義大家庭」の鉄条網のなかにとじこめて、ほしいままにふみにじり、しぼりとっているのである。かれらは覇者としての地位を利用して、「国際分業」とか、「生産の専門化」とか、「経済一体化」とかをおしすすめて、むりやりこれらの国ぐにの国民経済をソ修の必要に適応させ、ソ修の販売市場、付属加工工場、蔬菜・果樹園、牧場に変えて、おどろくべき超経済的搾取をおこなっている。

かれらはもっとも横暴で、もっとも凶悪な手段をつかって、これらの国ぐにをきびしく支配し、これらの国ぐにに大量の軍隊を駐留させ、はては公然と数十万の軍隊をくりだして、チェコスロバキアをかれらの軍靴のじゅうりんのもとにおき、銃剣でかいらい政権を

つくっている。これら裏切り者一味は、まさにレーニンがかつてきびしく糾弾した旧ツァーのように、完全に「**その隣人との関係を、農奴制的特権の原則のうえにうちたてているのである**」㉕。

ソ修裏切り者集団は、口先ではアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国に「援助」をあたえているといっているが、実際には「援助」の看板のもとに、けんめいになってこの地域の一部の国ぐにを自分の勢力範囲にくみいれて、アメリカ帝国主義と中間地帯を争奪しているのである。ソ修は兵器・弾薬の輸出、資本の輸出と不平等貿易によって、これらの国ぐにの資源を収奪し、その内政に干渉するとともに、機会をねらっては軍事基地をかすめとっている。

レーニンは、「**金融資本は、植民政策の数多くの『古い』動機に、原料資源のための、資本輸出のための、『勢力範囲』のための……さらに経済的領土一般のための、闘争をつけくわえた**」㉖と指摘している。ソ修社会帝国主義は、ほかでもなくこの資本帝国主義の軌道に沿ってすすんでいるのである。

ソ修裏切り者集団は、口先では各国の革命闘争を「全面的に支持する」といっているが、実際には世界のあらゆるもっとも反動的な勢力と結託して、各国人民の革命闘争を破壊しているのである。かれらは資本主義国の革命的大衆を「過激分子」「暴徒」だと狂気のようにののしり、これらの国ぐにの人民運動を分裂、瓦解させている。かれらは金と鉄砲をだして、インドネシア、インドなどの反動派が革命者を虐殺するのに直接手をかし、アジア・アフリカ・ラ

テンアメリカの人民武装闘争の烈火をもみけし、民族解放運動を弾圧することに、八方手をつくしている。かれらはアメリカ帝国主義と同じように、世界の憲兵をつとめているのである。

ソ修裏切り者集団は、口先では「反帝闘争」に賛成だといい、時にはアメリカを二言三言ののしることもあるが、実際にはかれらも米帝も世界制覇をたくらむ最大の帝国主義なのである。ソ修のいわゆるアメリカ「反対」は、各国人民のアメリカ帝国主義反対の闘争とは、まったく異なった別のことである。ソ修と米帝は世界再分割のために、互いに争奪し、また互いに結託している。ドイツ問題、中東問題、東南アジア問題、日本問題、核兵器問題など一連の重要な問題におけるソ修の行為は、すべてかれらが米帝と争奪し、また

結託していることの罪証である。ソ修と米帝はいずれも帝国主義の強権政治をおしすすめ、各国人民の利益を犠牲にしている。ソ修と米帝とのあいだになんらかの妥協があったとしても、それは強盗のあいだの一時的なとりきめにすぎない。

レーニンは、**「現代の軍国主義は資本主義の結果である」**㉗現代の戦争は**「帝国主義の本質から生まれてくるものである」**㉘と指摘している。

ブレジネフは登場後、軍国主義の道をますます遠くまでつっぱしっている。かれらは、フルシチョフの核恐かつの軍事戦略方針をうけついで、ミサイル核兵器の開発に大きな力をいれると同時に、通常軍備の拡充に拍車をかけ、陸海空三軍を全面的に強化し、全世界

で帝国主義の「砲艦政策」をおしすすめている。

戦争の問題では、いぜんフルシチョフは、いつわりの「武器もなく、軍隊もなく、戦争もない」世界なるものを鼓吹して、真の軍備拡張と戦争準備をおおいかくした。いまブレジネフのやからは、調子をいくらか変えて、けんめいに戦争熱をあおりたて、当面の国際情勢は「新しい世界大戦の危険をはらんでいる」㉙とさかんにわめきたて、「機先を制する」とおおっぴらに威かくし、かれらの「戦略ミサイル」は「いかなるところのいかなる目標をも消滅できる」㉚と吹聴している。かれらは、いっそう狂気のように軍事費を増大し、侵略戦争の動員と準備に拍車をかけ、ヒトラー式の電撃戦をおこすことをたくらんでいる。

ソ修裏切り者集団が奇襲攻撃のやり方でチェコスロバキアを占領し、わが国の領土珍宝島と鉄列克提などの地区を侵犯し、またわが国にたいして核威かくをおこなっていることは、ソ修社会帝国主義の侵略性と冒険性をあますところなく暴露している。アメリカ帝国主義と同じように、ソ修社会帝国主義のひとにぎりの寡頭は、すでに世界戦争を起こそうとしているいま一つの元凶となっているのである。

五、いわゆる「ブレジネフ・ドクトリン」とは まぎれもない覇権主義である

ブレジネフ裏切り者集団は、社会帝国主義の侵略・拡張政策をい

ちだんとおしすすめるため、フルシチョフ修正主義を発展させ、「ブレジネフ・ドクトリン」とよばれる一連のファッショ的「理論」をつくりだした。

ここで、「ブレジネフ・ドクトリン」とは、いったいどんなしろものかみてみよう。

その一、「有限主権論」。ブレジネフのやからは、かれらのいわゆる「社会主義の利益」を守ることは、すなわち「最高の主権」[31]を守ることであるといっている。かれらは、ソ修は他国の運命を決定することができ、「そのなかには、主権の運命も含まれる」[32]などと公言している。

よくも「社会主義の利益」などといえたものである！　ほかでも

なくきみたちがソ連の社会主義制度をくつがえし、また、資本主義を復活させる修正主義路線を東ヨーロッパの一部の国ぐにとモンゴルにまでおしすすめたのである。きみたちのいう「社会主義の利益」とは、ほかでもなく、ソ修社会帝国主義の利益であり、植民地主義の利益である。きみたちは、すべてに君臨する「最高の主権」を他国の人民におしつけている。つまり、他国の主権は「有限」であるが、他国を支配するきみたちの権力は「無限」であるというのである。それはまた、きみたちには他国に采配をふる権利があるが、他国にはきみたちに反対する権利はなく、きみたちには他国をふみにじる権利があるが、他国にはきみたちにさからう権利はないというのである。ヒトラーも「他人を支配する権利がある」[33]とほえ立

てたことがある。ダレスのやからも民族的主権は「もはやふるくさい観念に変わってしまっており」㉔、いわゆる「連合した主権」をもって「一国の主権」㉕にとってかわらせるべきである、などと鼓吹した。これでもわかるように、ブレジネフの「有限主権論」は、狂気じみた帝国主義のことばのやきなおしにすぎない。

その二、「国際独裁論」。ブレジネフのやからは、かれらには「社会主義制度にたいする脅威をとりのぞくために兄弟国へ軍事援助をあたえる」㉖権利があるといっている。かれらは、歴史の発展が「プロレタリア階級独裁を一国の独裁から世界政治全体に決定的な影響をおよぼすことのできる国際的独裁に変える」と「レーニンが予言していた」㉗などといっている。

これら裏切り者一味は、レーニンの思想をまったくねじまげているのである。

レーニンは、「民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案」という論文で「**プロレタリア階級独裁を一国的な（すなわち一国に存在していて、世界政治を規定することのできない）ものから、国際的なもの（すなわち世界政治全体に決定的な影響をおよぼすことができる、少なくともいくつかの先進国のプロレタリア階級独裁）へ転化させる**」㉘とのべている。レーニンのいう本来の意味は、プロレタリア国際主義を堅持し、プロレタリア世界革命を宣伝することである。ところが、ソ修裏切り者集団は、こともあろうに、レーニンのこのことばのプロレタリア階級の革命の精神を骨抜きにし、公

然と「国際独裁論」なるものをつくって、これを東ヨーロッパの一部の国ぐにとモンゴルにたいして軍事干渉と軍事占領をおこなう「理論」的根拠にしている。きみたちのいう「国際的独裁」というのは、他国を新ツァーの支配と隷属のもとにおくことである。「兄弟国を援助する」という看板をかかげれば、きみたちの軍事力で他国をしいたげてもよいというのか？　きみたちの軍隊を勝手に他国に進入させて横暴にふるまわせてもよいというのか？　きみたちは「連合軍」という旗じるしをかかげてチェコスロバキアに侵入したが、これは往年の八ヵ国連合軍による中国への進攻、十四ヵ国によるソ連への武力干渉、アメリカ帝国主義が「十六ヵ国」を組織して朝鮮を侵略したのとどんな違いがあるのか！

その三、「社会主義大家庭論」。ブレジネフのやからは、「社会主義大家庭は、不可分の統一体であって」[39]、「社会主義大家庭」の「統一行動」[40]を強化しなければならない、などと鼓吹している。

よくも「社会主義大家庭」などといえたものである！　それは、きみたちを宗主国とする植民帝国の別名にすぎない。真の社会主義国間の関係は、大国小国をとわず、すべてマルクス・レーニン主義の基礎のうえにうち立てられ、完全な平等、領土保全の尊重、国家の主権と独立の尊重、相互内政不干渉という原則の基礎のうえにうち立てられ、プロレタリア国際主義の相互支持と相互援助の原則の基礎のうえにうち立てられなければならない。ところが、きみたちは、他国をその足でふみつけ、これらの国をきみたちに従属させ、

依存させている。きみたちのいう「統一」とは、他国の政治、経済、軍事をみなきみたちのところに「統一」するということである。きみたちのいう「不可分」とは、他国がきみたちの支配と隷属のもとからぬけだすのを許さないということである。これは、あからさまに他国の人民をきみたちの奴隷にしようとすることではないか？

その四、「国際分業論」。ブレジネフのやからは、フルシチョフがまえまえから鼓吹していたこの謬論を大いに発展させて、われわれがさきにのべたように、東ヨーロッパの一部の国ぐにとモンゴルでいわゆる「国際分業」をおしすすめているばかりでなく、それをアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国にまでひろげている。かれらはつぎのようにいっている。アジア・アフリカ・ラテンアメリカ

諸国は、ソ修と「協力」してこそ、「独立した民族経済をうち立てる」㊶ことができる。「ソ連にとってもまた、こうした協力は国際分業の優越性をいっそう広範に利用するうえで、より多くの可能性を提供している。われわれは、これらの国から綿花、羊毛、皮革、非鉄金属の精鉱、植物油、果物、コーヒー、ココア・ビーン、茶、その他の原料ならびに製品といったその伝統的な商品を日ましに多く購入することができる」㊷。

「伝統的な商品」とはよくいったものである！

惜しいかな、この商品リストは、不完全なもので、さらに、石油、ゴム、肉類、蔬菜、米、ジュート、蔗糖などを加えるべきである。

ひとにぎりのソ修寡頭からみれば、まるでアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国の人民は、代々かれらのためにこれらのいわゆる「伝統的な商品」を提供することを運命づけられているかのようである。これはなんという「理論」なのか？　植民地主義者と帝国主義者は、資本主義工業国にとってもっとも都合のいい、もっとも残酷な植民地的搾取をすすめるため、はやくから、各国の自然条件にもとづいて生産の種類を決めなくてはならないなどと大いにさけび、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国を強引に原料産地に変え、たちおくれた状態を保たせてきた。ソ修集団はまさに帝国主義のこうした植民政策をうけついだのである。かれらの「国際分業論」とは、つまり、「ソ連は工業、アジ

ア・アフリカ・ラテンアメリカは農業」、あるいは「ソ連は工業、アジア・アフリカ・ラテンアメリカは付属加工工場」というものである。

真の社会主義国は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国と平等互恵の基礎のうえに有無相通じ、互いに援助しあうが、これはこれらの国ぐにが独立自主の民族経済を発展させるのを促すためである。ところが、ひとにぎりのソ修寡頭が鼓吹する「国際分業論」というのは、完全に、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国にたいして浸透、支配、収奪をすすめ、かれらの勢力範囲をひろげ、これらの国ぐにはソ修植民地主義の新しい首かせをかけるためのものである。

その五、「利益関係論」。ブレジネフのやからは、「ソ連は、世界の一大国としての広範な国際的連係をもっており、たとえ地理的に遠く離れていても、われわれの安全およびわれわれの友人の安全にかかわりのある事件にたいしては、消極的に対処することはできない」㊸と揚言している。かれらは、「ソ連の艦隊」は、「わが国の安全の利益にとって、行く必要のあるすべてのところを航行する」㊹などと公然とさけび立てているのである！

大国であるからといって、世界各地をみな自分の利益のあるところとみなして全世界に手を伸ばし拡張してもよいというのか？　広範な国際的連係をもっているからといって、いたるところに自分の砲艦をくりだして威かくと侵略をおこなってもよいというのか？

こうしたいわゆる「利益関係論」は帝国主義の世界侵略政策の典型的な論調である。その昔旧ツァーが対外拡張にあたってかかげたのは、ほかでもなく「ロシアの利益のために」という旗じるしであった。アメリカ帝国主義もつねに、アメリカは「自分の安全に責任を負っている」ばかりでなく、「すべての自由諸国の安全にも責任を負っており」、アメリカは「必要なすべてのところで自由を守る」㊺とさけび立てている。ソ修の言い草は、旧ツァーやアメリカ帝国主義の言い草となんと似ていることか！

思想、理論、政治の面でとっくに破産したソ修裏切り者集団には、まともなしろものなど絶対に持ちだせるものではなく、帝国主義のところから、一山のガラクタを拾ってきて、レッテルをはりかえ、

「ブレジネフ・ドクトリン」なるものを持ちだすほかなかったのである。この「ブレジネフ・ドクトリン」は、「社会主義」のレッテルをはった帝国主義であり、まぎれもない覇権主義であり、赤裸々な新植民地主義なのである。

六、ソ修のはかない大帝国の夢

百年前に、マルクスはツァー・ロシアの侵略政策を暴露したさい、「**その方法、その戦術、その手法は変わるかもしれないが、この政策のめざすところ——世界支配——は不変のままである**」㊻と指摘した。

ツァー・ニコライ一世はかつて、「ロシアの国旗があがったところではどこであろうと、それをふたたびおろしてはならない」㊼と思いあがったさけびをあげた。幾代にもわたるツァーはみな——エンゲルスがいったように——エルベ川から中国にかけ、アドリア海から北氷洋にまたがる大「スラブ帝国」をうち立てるという甘い夢をみていた。かれらはさらにこの大帝国の版図をインドとハワイにまでひろげようとさえ考えていた。この目的を実現するため、かれらは「**その腕にまかせて、良心のないひどい事をどんどんやってのけたのである**」㊽。

ソ修新ツァーは旧ツァーの拡張主義の伝統をそっくりうけつぎ、その顔にロマノフ王朝の烙印を深く刻みつけている。かれらはいま、旧ツァーが実現しなかった昔の夢をふたたび追っており、しか

もその侵略の野心は旧ツァーよりはるかに大きい。ソ修は東ヨーロッパの一部の国ぐにとモンゴルを自分の植民地、従属国にしている。かれらはまた、いっそう多くの中国の領土を侵略・占領しようと大それたことを考え、公然と旧ツァーの対中国政策を踏襲し、中国の北部国境は「長城に沿っている」[49]などとさけび立てている。かれらはその手足を東南アジア、中東、アフリカさらにラテンアメリカにまでのばし、艦隊を地中海、インド洋、太平洋、大西洋におくりこんでおり、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、ラテンアメリカにまたがるソ修大帝国をうち立てようとくわだてている。

旧ツァーの「スラブ帝国」はとっくに水の泡のように消え、ツァーの支配そのものも、一九一七年、レーニンの指導した偉大な十月

革命によってとっくに消滅され、旧ツァーの支配はくずれさった。こんにち、帝国主義が全面的崩壊にむかっている時代に、新ツァーが全世界に覇をとなえるいっそう大きな大帝国を新たにうち立てようとたくらんでも、それは一場のはかない夢でしかない。

スターリンはかつて、**「レーニンは、帝国主義を『死にかけている資本主義』とよんだ。なぜか？　なぜなら、帝国主義は、資本主義の矛盾を最後の線まで、つまり、それをこえれば革命がはじまるという極限まで、もってゆくからである」**[50]とのべた。

ソ修が帝国主義のふるい道を歩んでいる以上は、必然的に帝国主義の法則に左右され、帝国主義に固有のさまざまの矛盾の衝撃のなかにおちこむ。

毛沢東同志は、「**アメリカはハリコの虎である。あなたがたはアメリカを信じてはいけない。それはちょっとつけば破れるものである。修正主義のソ連もハリコの虎である**」[51]と指摘している。

ソ修社会帝国主義が侵略拡張に狂奔していることは、必然的にその願いとは逆の方向にむかい、自分の壊滅の条件をつくりだす。ソ修は、いわゆる「社会主義大家庭」の各国を自分の領地とみなしているが、しかし、絶対にその植民支配を長期にわたってこれらの国ぐにの人民におしつけることができるものではないし、また、自分とこれらの国ぐにとの矛盾を緩和できるものではない。こんにちの東ヨーロッパは火薬樽のようなもので、いつかはかならず爆発する。ソ修戦車のプラハ進入はけっしてソ修社会帝国主義の強大

さを示すものではなく、ソ修植民帝国の崩壊のはじまりの徴候にほかならない。ソ修社会帝国主義の泥足は、すでにチェコスロバキアの深い沼にはまりこみ、ぬけだせなくなっている。

ソ修はアジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域にたいする拡張と収奪によって、自分をアジア・アフリカ・ラテンアメリカ人民と対立する位置においている。その屋台をあんなにひろげたので、自分で大きな荷物を背おってしまい、全身にむくみがきている。アメリカ帝国主義の新聞でさえも、「われわれは、ロシア人がわれわれ以上でないにしても、われわれと同じように大きなあやまりを犯したのを発見した」[52]といっている。

ソ修社会帝国主義が世界の帝国主義の列にくわわったことは、帝

国主義間の矛盾をいっそうするどいものにしている。それぞれの勢力範囲をひろげるため、かれらははげしく角つきあいをしている。世界人民の十重二十重の包囲のなかにあって、社会帝国主義と帝国主義との争いは、帝国主義全体が滅亡にむかう過程をはやめるだけである。

ソ修社会帝国主義の自国における支配も火山の噴火口のうえにうち立てられている。かつてストルィピン反動期にレーニンは、ロシアの労働者階級の闘争は、**「急速にすすむかも知れないし、ゆっくりとすすむかもしれない」「しかしどのみちそれは革命にむかってすすみつつある」**[53]とかいたことがある。こんにち、ソ連国内の新しい型の官僚独占ブルジョア階級と奴隷的地位におかれているプ

ロレタリア階級、勤労農民、革命的知識分子とのあいだの衝突と敵対は、日ましにはげしくなっている。階級闘争の発展は、人びとの意志によって左右されることなく、おそかれはやかれ革命をひきおこすものである。

ソ連はもともと多民族からなる社会主義国の同盟であった。こうした多民族国家同盟は、ただ社会主義という条件のもと、平等と自由意志の基礎のうえにのみうち立てることができ、強固になり、発展することができる。スターリンが指摘しているように、ソ連は**「ブルジョア諸国において、多民族からなる国家の成功しなかった経験を目の前に見ていた。旧オーストリア・ハンガリア帝国の失敗に帰した経験を目の前に見ていた」**。しかしソビエト多民族国家は

「ありとあらゆる試練にたえぬける」、なぜなら、社会主義制度によって「一つの統一同盟国家の体系内での諸民族の、ほんとうの同胞的協力の関係がうち立てられたからである」[54]。現在、ソ修裏切り者集団はすでに社会主義制度をくつがえし、ブルジョア階級独裁を実施し、民族抑圧をもって民族平等にとってかわらせ、ブルジョア階級の「弱肉強食」をもって諸民族間の相互援助・友愛にとってかわらせた。もとの同盟のプロレタリア階級的基礎と社会主義的基礎が捨てさられてしまったからには、この新しい型のブルジョア階級の支配下にあるぼう大な多民族のいわゆる「同盟」に、昔日のオーストリア・ハンガリア帝国のようにいつかは失敗に帰する危機がないといえるだろうか？

内外ともに困難をかかえた絶体絶命の境地からぬけだすため、ソ修社会帝国主義はアメリカ帝国主義と同じくミサイル核恐かつを大いにすすめており、軍事冒険をやることと大規模な侵略戦争をおこすことにのぞみをかけている。しかし、戦争によって帝国主義と社会帝国主義が九死に一生を得ることができるだろうか？　できない。それとはまったく反対である。帝国主義は戦争によってその瀕死の運命を救うことができないばかりでなく、その滅亡をはやめるだけだということを歴史は論駁の余地なく立証している。

毛主席は、「世界大戦の問題については、二つの可能性しかない。一つは戦争が革命をひきおこすことであり、一つは革命が戦争をおしとどめることである」[55]と指摘している。

毛主席はまた、「全世界人民は団結して、いかなる帝国主義、社会帝国主義のひきおこす侵略戦争にも反対し、とりわけ原子爆弾を武器として使用する侵略戦争に反対しよう！　もしこのような戦争がおこったならば、全世界人民は革命戦争によって侵略戦争を消滅すべきであり、いまからその準備をしておかなければならない！」[56]と指摘している。

毛主席が当面の国際情勢にもとづいておこなったこの偉大な指示は、全世界のプロレタリア階級と革命的人民に闘争の方向をさし示した。全世界の人民は、かならず高度の警戒心を保ち、あらゆる準備をととのえ、あえて戦争をおこす侵略者にいつでも断固とした壊滅的な打撃をあたえなければならない！

ここ数年らい、ソ修裏切り者集団は旧ツァーの使いふるした手口をうけついで、いま新たな「パン・スラブ主義運動」なるものを半ばかくれながら、半ば公然と支持、画策し、「ロシア民族精神の神聖さ」とやらをさかんに宣伝しており、こうした反動的な思潮でソ連の勤労大衆と若い世代をむしばみ、ソ連人民をひとにぎりのソ修寡頭の侵略政策と戦争政策の道具となるように仕向けようとしている。われわれは兄弟のソ連人民にけっして「パン・スラブ主義」のわなにかからないよう心から注意を促したい。

「パン・スラブ主義」とはなにか？

マルクスとエンゲルスは旧ツァーを暴露したさい、「パン・スラブ主義というのは、サンクト・ペテルブルクの内閣が発明したもの

である」[57]とずばりと指摘した。エンゲルスは、旧ツァーはこうした欺まん的な手段を使って戦争を準備し、それを「**ロシア・ツァーリズムとロシア反動勢力を救う最後の一縷の望みとしていた**」。したがって、「**パン・スラブ主義はわれわれとロシア人のもっとも凶悪な敵である**」[58]とのべている。

ソ修新ツァーの「パン・スラブ主義」は、ヒトラーの「アーリア人至上」と同じように極度に反動的な人種主義である。かれらがこうした反動思想を宣伝するのは、まったくかれらのいわゆる「優秀民族」のなかのひとにぎりの反動支配者の対外拡張に役立てるためであって、広範な人民にとっては、きわめて大きな災難を意味するだけである。

レーニンは、「**『異民族』への抑圧は諸刃の剣のようなものである。それは、一方の刃では『異民族』を、他方の刃ではロシア民族を切るのである**」[59]と指摘したことがある。いま、ひとにぎりのソ修寡頭は、まさに「パン・スラブ主義」なる煙幕のもとに、一方では侵略戦争の画策に拍車をかけ、他方ではロシア民族をふくむソ連人民への攻撃に拍車をかけている。

ソ連のプロレタリア階級と広範な人民の利益は、ソ修新ツァーの利益とまったく対立するものであって、全世界の革命的人民の利益とは一致するものである。ソ修新ツァーがもし大規模な侵略戦争をひきおこすならば、帝国主義の侵略戦争に対処するレーニンの原則にしたがって、ソ連のプロレタリア階級と革命的人民は、けっして

ソ修社会帝国主義のひきおこす正義にもとる戦争のために力をつくすようなことはない。かれらは、偉大な十月革命の英雄的な人びとの事業をうけついで、新ツァーをうちたおし、プロレタリア階級独裁をふたたびうち立てるため奮闘するであろう。

二百年前、ロシアのある詩人は、ツァー・エカテリーナ二世の侵略の「戦果」をほめちぎったさい、「突き進め、さらば全世界はあなたのもの」[60]とかいた。いま、ソ修新ツァーは、すでに旧ツァーの馬にまたがって「突き進んでいる」。かれらは、わけもわからずに八方へつっぱしり、どうにも御し切れなくなっており、かれらの先祖がこの馬からころげ落ちて、ロマノフ王朝のロシア帝国に終止符がうたれたことをすっかり忘れてしまっている。新ツァーの末路

が旧ツァーよりましであるはずはけっしてなく、かれらもかならず馬上からころげ落ちてその身をこなごなにくだくにちがいない。

七、全世界人民は団結して、米帝、ソ修および各国反動派を打倒するためにたたかおう

毛沢東同志は、「ソ連は最初の社会主義国であり、ソ連共産党はレーニンがつくりあげた党である。いま、ソ連の党と国家の指導部は修正主義者にのっとられてはいるが、しかしわたしは、ソ連の広範な人民、広範な党員と幹部はよい人たちで、革命を求めており、修正主義の支配は長く続くものではないということを同志たちにかたく信じてほしいと思う」[61]と指摘している。

中国人民はソ連人民に深い感情をいだいている。レーニンの指導した偉大な十月革命のなかで、当時ロシアにいた中国の勤労者は、ロシアのプロレタリア階級と肩を並べてたたかった。われわれ両国人民は、長期にわたる革命闘争のなかで互いに支持しあい、援助しあって、親密な友誼をきずいた。ひとにぎりのソ修寡頭は、中ソ両国人民の関係を離間、破壊することに血道をあげているが、結局は、石をもちあげて自分自身の足を打つことになるだけである。

ソ連人民は、レーニンとスターリンの教えをうけた、光栄ある革命の伝統をもつ偉大な人民であって、新ツァーが自分たちの頭上に君臨するのを、いつまでも我慢しているはずは絶対にない。十月革命の成果はソ修裏切り者に台なしにされたとはいえ、十月革命の原則は

永遠に不滅である。レーニン主義の偉大な旗じるしのもとに、人民革命の激流はかならず修正主義支配の氷の層をつき破るにちがいないし、社会主義の春はかならずソ連の大地によみがえるであろう！

毛沢東同志はつぎのように指摘している。「中国においても、世界各国においても、総じていえば、九〇パーセント以上の人は、結局は、マルクス・レーニン主義を擁護するようになる。世界には、いままだ大勢の人が、社会民主主義政党の欺まんのもとにあり、修正主義の欺まんのもとにあり、帝国主義の欺まんのもとにあり、各国反動派の欺まんのもとにあって、まだめざめていない。しかし、かれらはかならず一歩一歩めざめるようになり、かならずマルクス・レーニン主義を擁護するようになる。マルクス・レーニン主義

という真理は、さえぎることのできないものである。人民大衆はかならず革命を求めるものである。世界革命はかならず勝利するものである」[62]。

偉大なレーニンの生誕百周年を記念するにあたって、われわれはつぎのことに喜びを感じている。マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想の導きのもとに、世界のプロレタリア革命事業はたえず勝利をかちとっている。全世界の真のマルクス・レーニン主義勢力は日ましに成長し、強大になっている。被抑圧民族と被抑圧人民の解放闘争は、さかんな勢いで発展している。米帝とソ修の侵略、支配、干渉、侮辱をうけているすべての国と人民は、もっとも広範な統一戦線を結成しつつある。米帝とソ修に反対する歴史の新しい時

期がすでにはじまっている。帝国主義と社会帝国主義の弔い鐘が鳴りひびいている。

無敵のマルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想は、プロレタリア階級が世界を認識し、世界を改造する強力な武器であり、歴史の前進を推進する強力な武器である。マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想が幾億もの革命的大衆と結びつき、各国人民の革命の具体的実践と結びつけば、つきることのない革命的威力を発揮して、旧世界全体をこっぱみじんにうちくだくことができるにちがいない！

偉大なマルクス主義万歳！

偉大なレーニン主義万歳！

偉大な毛沢東思想万歳！

注

① スターリン「レーニン主義の基礎について」、『スターリン全集』中国語版、第六巻、第六三ページ。

② レーニン「プロレタリア革命の軍事綱領」、『レーニン全集』中国語版、第二十三巻、第七五ページ。

③ 毛沢東「人民民主主義独裁について」、『毛沢東選集』中国語版、第四巻、第一四七六ページ、一四七五ページ。

④ 毛主席の一九五七年四月十七日の講話。

⑤ レーニン「帝国主義および社会主義運動における分裂」、『レーニン全集』中国語版、第二十三巻、第一一七ページ。

⑥ レーニン「国家と革命」、『レーニン選集』中国語版、第三巻、第一七九ページ。

⑦ レーニン「国家と革命」、『レーニン選集』中国語版、第三巻、第一八四ページ。

⑧ レーニン「社会主義革命と民族自決権」、『レーニン全集』中国語版、第二十二巻、第一三八ページ。

⑨ レーニン「プロレタリア革命と背教者カウツキー」、『レーニン全集』中国語版、第二十八巻、第二三五ページ。

⑩ レーニン「国家と革命」、『レーニン選集』中国語版、第三巻、第一九二ページ。

⑪ 毛主席の中国共産党第八期中央委員会第二回総会における講話（一九五六年十一月十五日）。

⑫ 毛主席の一九六二年八月の北戴河中央工作会議と九月の中国共産党第八期中央委員会第十回総会における講話。

⑬ 中国共産党中央委員会『通知』（一九六六年五月十六日）。

⑭ 毛主席の一九六四年八月の談話。
⑮ 毛主席の一九六四年五月十一日の談話。
⑯ ソ修「第二十二回大会」で採択された『ソ連共産党綱領』。
⑰ ソ修『レーニン生誕百周年記念テーゼ』。
⑱ ソ修『プラウダ』紙（一九七〇年三月五日）。
⑲ レーニン「社会主義と戦争」、『レーニン全集』中国語版、第二十一巻、第二八五ページ。
⑳ レーニン「第一回全ロシア海軍大会での演説」、『レーニン全集』中国語版、第二十六巻、第三二二ページ。
㉑ レーニン「革命的プロレタリア階級と民族自決権」、『レーニン全集』中国語版、第二十一巻、第三九二ページ。
㉒ レーニン「内政評論」、『レーニン全集』中国語版、第五巻、第二五八ページ。

㉓ 『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』中国・人民出版社版、第四七一ページ。
㉔ レーニン「第三インタナショナルの任務について」、『レーニン全集』中国語版、第二十九巻、第四五八ページ。
㉕ レーニン「大ロシア人の民族的誇りについて」、『レーニン全集』中国語版、第二十一巻、第八五ページ。
㉖ レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」、『レーニン全集』中国語版、第二十二巻、第二九三ページ。
㉗ レーニン「好戦的軍国主義と社会民主党の反軍国主義的戦術」、『レーニン全集』中国語版、第十五巻、第一六六ページ。
㉘ レーニン「ロシア共産党（ボ）第八回大会」、『レーニン全集』中国語版、第二十九巻、第一六八ページ。
㉙ ソ修『ウチィチェリスカヤ・ガゼータ』紙（一九七〇年二月五

日)。

㉚ ソ修国防相グレチコの文章。ソ修『コムニスト』誌(一九六九年第三号)。

㉛ ソ修『メジュドゥナロードナヤ・ジーズニ』誌(一九六八年第十一号)。

㉜ ソ修『クラスナヤ・ズベズタ』紙(一九六九年二月十四日)。

㉝ 『ニュールンベルグ裁判』第二巻。

㉞ アメリカ『フォーリン・アフェアース』誌(一九五七年十月号)。

㉟ ジェサップ『現代国際法』。

㊱ ポーランド修正主義の「第五回大会」におけるブレジネフのあいさつ(一九六八年十一月十二日)。

㊲ モスクワ十月革命記念日「祝賀会」におけるマズロフの報告(一

九六八年十一月六日)。

㊳ レーニン「民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案」、『レーニン選集』中国語版、第四巻、第二九二ページ。

㊴ ソ修『イズベスチヤ』紙(一九六八年七月二日)。

㊵ 一九六九年黒いモスクワ六月会議の『主要文書』。

㊶ 黒いモスクワ会議におけるブレジネフの発言(一九六九年六月七日)。

㊷ ソ修「第二十三回大会」におけるコスイギンの報告(一九六六年四月五日)。

㊸ 「ソ連最高会議」におけるグロムイコの報告(一九六九年七月十日)。

㊹ 一九六九年ソ連海軍記念日にあたってのソ修海軍総司令官ゴルシュコフの演説。

㊺ アメリカ前大統領ジョンソンの演説（一九六四年六月三日、六月二十日）。

㊻ マルクス「一八六七年一月二十二日、ロンドンにおけるポーランド蜂起記念集会での演説」、『マルクス、エンゲルス全集』中国語版、第十六巻、第二二六ページ。

㊼ ネベルスコイ『ロシア海軍将校の極東ロシアにおける功績』中国語版、第一二四ページ。

㊽ エンゲルス「ロシア・ツァー政府の対外政策」、『マルクス、エンゲルス全集』中国語版、第二十二巻、第一七ページ。

㊾ 一九六九年『ソ連政府の六月十三日の声明』。

㊿ スターリン「レーニン主義の基礎について」、『スターリン全集』中国語版、第六巻、第六五ページ。

(51) 毛主席の一九六四年一月三十日の談話。

(52) 『US・ニュース・アンド・ワールド・リポート』誌（一九七〇年一月五日）。

(53) レーニン「デモンストレーションのはじまり」、『レーニン全集』中国語版、第十六巻、第三五七ページ。

(54) スターリン「ソ連憲法草案について」、『レーニン主義の諸問題』中国・人民出版社一九六四年版、第六四九——六五〇ページ。

(55) 林彪同志『中国共産党第九回全国代表大会における報告』から引用。

(56) 『人民日報』『紅旗』『解放軍報』一九七〇年元旦社説「偉大な七十年代を迎えて」（『人民日報』一九七〇年一月一日）から引用。

(57) マルクス、エンゲルス「社会主義民主同盟と国際労働者協会」、

『マルクス、エンゲルス全集』中国語版、第十八巻、第四九二ページ。

(58) エンゲルスの一八八二年二月七日カウツキーへの手紙、『マルクス、エンゲルス芸術論』中国語版、第三分冊、中国・人民文学出版社一九六三年版、第三六一ページ。

(59) レーニン「民族平等」、『レーニン全集』中国語版、第二十巻、第二三三ページ。

(60) デルシャビン『ワルシャワ攻略をたたえる』。

(61) 毛主席の、拡大した中央工作会議における講話（一九六二年一月三十日）。

(62) 同上。

レーニン主義なのか
それとも
社会帝国主義なのか？
*
1970年　　初版発行
出版者　外文出版社（北京）
発行者　中国国際書店
編号：（日）3050—2179
定価 50 円
3—J—1221Pc
00019